

論理的モノログに於ける「わけだ」文について

中野琴代

1. はじめに

聴解という行為は、その内容に関心を持って聴くという意欲・動機はもちろんのこと、その他にも認識力、推測力、情報処理能力等の総合的活用による理解、解釈の生成行為である。これは人間の聴解力がノイズ（コミュニケーション達成妨害の全ての要因）に強く、発話の際の不注意な発音、言い誤りや省略、繰り返し、文法的混乱等を補正し、また必要な（または自分が聞きたい）情報とそうでないものを選択しながら聴くことができるという特性とも密接に関連する。つまり人間の聴解力は言語知識、言語運用能力と連携して物理的聴力以上の内容を聴き取ることが可能であり、この能力は意識的訓練によって向上させることができる。言語学習初級段階での、逐音逐語の聞き取りを要する「ボトムアップ」型の聴解から、上級に必要な、全体から詳細へ内容を理解していく「トップダウン」型の聴きが可能になるのはこのような能力の伸長があるからこそのである。

筆者の担当する学部生のための日本語クラスでは、主として生教材を使用して聴解練習をおこなっているが、その中で「トップダウン」型聴解を行うに当たって重要な鍵となる表現文型があることに気がつく。ここで取り上げる「わけだ」文もその一つである。「わけ」は本来の名詞（実質名詞）としては基礎語彙に入るもので決して理解が難しいものではない。しかし文、または段落単位でのムードの助動詞用法「わけだ」の意味・機能は文脈のなかで決まるところが大きく、外国人日本語学習者にとって理解の困難なものの一つとなっている。

日本語教育に於いての「わけだ」文については、これまでもいくつかの重要な先行研究があり、その意味・用法について説明されてきているが、文・段落内での現われ方、表わされるムードについてその実態が完全に明らかにされたとは言えない。本稿は、話言葉の中でも論理的な独話体⁽¹⁾に於ける「わけだ」文の使用を取り上げ、その中で「わけだ」が

どのように現われるかについて考察することを第一の目的とし、その上で「わけだ」使用の話者の意図についても考えてみたい。

なお考察の対象は助動詞機能の肯定形「わけだ」に限り、否定形の「わけではない」「わけがない」「わけにはいかない」及び実質名詞としてのものについては、ここでは取り上げない。

2. 「わけだ」文についての先行研究

「わけだ」文についての主な先行研究として、寺村(1982, 1984)⁽²⁾、松岡(1987)⁽³⁾、劉(1996)⁽⁴⁾がある。以下に簡単にその骨子を述べる。

2-1. 寺村の説

寺村(1982, 1984)は、「わけだ」文の意味・内容を究明し、P（前提・条件、常識・既知情報 以下同）とQ（帰結・結論 以下同）を<P→Q わけだ>の形で述べる意味を大きく3つに分類している。

□寺村(1984)の意味分類

- (i) あるQという事実に対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実Pをあげ、そこから推論すれば当然Qになる、ということを用いる言い方。「…コトニナル」と言い替えることができる。
- (ii) Pという聞き手に身近な事実をあげ、その事実、ある角度、観点から見るとQという意味、意義がある、ということを用いる言い方。「言い換えると…」というぐらいの軽い感じの場合もある。
- (iii) P→Qという推論の過程は示さず、Qということ、自分がただ主観的にそう言っているのではなく、ある確かな根拠があっての立言なのだということを言外に言おうとする言い方。乱用すると独断的、押し付け的な印象を与える。

寺村の研究は意味・内容の分類であり、「わけだ」使用の具体的な構造・形式についてはふれていないが、この解釈、意味分類の大義は現在に至るまで通

用、支持されており、これを大きく覆えすものはこれまでにない。

2-2. 松岡の説

松岡(1987)は寺村の意味分類を基盤として、「わけだ」の最も基本的な意味を「PとQとの間に因果関係、同じ物事の表と裏、あるいは対立の関係等があることを話し手が認め、納得すること」であるとする。そして「関係を認め、納得することが基本なのだから、PとQのいずれかが言わなくて済む(繰り返す必要がない)となれば」、PまたはQのどちらかが消去される場合もあるとして、その構造を以下のように分類している。

□松岡の構造分類

- ・両方が提示される場合 [P, Q] わけだ
- ・どちらかが消去される場合
 - ①Pを知って、 $P \rightarrow Q$ の関係を納得する場合 [P], [Q] わけだ
 - ②Qを知って、 $P \rightarrow Q$ の関係を納得する場合 [P, (Q)] わけだ
 - ③P, Qの関係が話し手の中で未分化、ないしは融合した場合 \rightarrow [一, Q] わけだ

この構造分類の内③について松岡は「話し手の側に、自分のしゃべっていることは聞き手も承知の前後関係の中で述べているのであり、ことさら因果関係を述べなくとも納得してもらえはるはずだ」という意思がある場合に生ずる」として、これを寺村の分類の(iii)に相当するものとしている。(松岡の意味分類の「因果関係」は寺村の(i)に、「表裏」は寺村(ii)に相当する。)

松岡の分析は構造と意味・内容が中心であり、その他の外形的特徴についての分類はない。ただ部分的にはあるが、「のだ」の文と「わけだ」文の対照の中で、「わけだ」文の前に(「のだ」文同様)「結局、要するに、つまり、一言で言えば、換言すれば、言い替えれば、簡単に言えば、手っ取り早く言えば」などの語句が見られることについて、これらの接続表現は「(「のだ」の文同様)P, Qの関係にあって既に前に言われているため繰り返す必要のなくなったQ,あるいはPの部分を代行し、P, Qの関係の存在をより明確に伝えるのが、これらの語句の役割」であると述べている。

2-3. 劉の説

劉(1996)は、「わけだ」の用いられている文や

段落の形式上の特徴を考察することによって、文章内の論理関係、及びその意味・機能を解明しようとするものであり、その分類は寺村、松岡の分類と必ずしも一致していない。

□劉の分類

- (1)当然の帰結 a) 推理・推論の当然の帰結・結果
・結果 $P\text{-Cnf} \rightarrow Q$ わけだ
 $P\text{-}\phi \rightarrow Q$ わけだ
b) PとQの関係の提示
 $P\text{-Cnf} \rightarrow Q$ わけだ
c) Qの根拠・理由づけ
 $Q \Leftarrow \{P\text{-Cf} \rightarrow Q\}$ わけだ
- (2)あるコトに a) 理由についての補足的説明
対する補足的説明 $Q \Leftarrow P$ わけだ
b) 意味・内容についての補足的説明 $Q \Leftarrow \phi = Q'$ わけだ,
 $Q \Leftarrow Cr = Q'$ わけだ
- (3)既知情報の再提示 $Q \cdots Q$ わけだ
- (4)常識・慣例、
顕在の事実の提示 Q わけだ

接続表現

Cnf—と、ば、なら、ならば
Cf—から、ので、したがって、だから、ゆえに、
このように、こうして
Cr—つまり、すなわち、要するに、言い替えれば、
 ϕ —接続表現無し

劉の分析は主として書き言葉を資料としたものであるが、外形上の特徴として構造(PとQの配置順)と接続表現の種類を手がかりとして分類している。しかし接続表現以外の特徴(マーカーとなるもの)があるかどうか、また接続表現の有無と話者の意図とのつながりについてはふれていない。

3. 「わけだ」文の分類

本稿の目的は、「わけだ」文が文章または段落の中でどのように現われるかを分析し、周囲の文脈とのつながりからその使用の意図を考察しようとするものである。方法として、まず資料とする用例をPとQのつながりの内容によって、因果関係、表裏、融合型の3種に整理し、次にそれぞれの用例に於けるPとQの構造、接続表現(C)などの特徴から文

脈とのつながり、話者の意図を考察していく。

3-1. 因果関係の「わけだ」文

寺村の分類の(i) (松岡の因果関係, 劉の当然の帰結・結果と理由の補足) にほぼ相当するものである。資料に採取した用例(124例)のうちこの因果関係が約半分を占めている。

3-1-1. 接続表現を有する場合<P-C→Q わけだ>

最初に、PとQとの間に接続表現を有する典型的な例をあげる。

- (1) たとえば、ばらばらになっていた時間を集めてみよう。そして有効に使おう。一例をあげますと、アメリカでは例えば、キング牧師の業績をたたえるために彼の誕生日を国民の祝日にしましたが、実際の誕生日は一月十五日ですが、これが一月の第三月曜日ということになりました(P)。そうしますと、土、日、月とそこで三連休ができる(Q)わけですね。(『時間の創り方』)

- (2) こんな形で日本映画がまだそれでもシェアを守っていられるのは一体どういうわけかということになると思います。(実質名詞) 私はそれは日本語という独自の言語をもっていて、他の言語が、我々の、地続きの大陸から離れた島国です(P)から、何千年にもわたって、この島国の中で日本語というものによって生活が可能だった(Q)わけですね。(『映画と日本語』)

(1)と(2)の両例ともPとQが続けて提示されており、しかもPとQの間に「そうしますと」「～から」といった仮定または確定をあらわす接続詞が介在することによって、PとQの因果関係というつながりであることがより明確に示されている。

また接続詞ではないが、やはり接続の役割を担う語句を有するものがある。

- (3) 先週モンゴルの首都ウランバートル市に行って参りました(Q)。モンゴルというのは社会主義国としては世界で二番目、人口235万人、そういうモンゴルで今、特に福祉の問題が深刻に起こってきております(P)。それに対して、国会の常任委員長のオトンバイル博士のお招きによって(P)、いろいろ意見を交換しに伺ってきた(Q)わけでございます。(『モンゴルの福祉問題』)

(3)の用例は、最初にある事実「モンゴル訪問」

(Q)が提示され、続いて「福祉の問題が深刻である=「それ」に対応して」(P)話者にモンゴル政府から招請があった=「お招きによって」(P')、だから行ってきたのだ(Q)という因果関係(Q←{P→P'→Q})であり、劉(1996)のQの根拠・理由づけに相当するものである。この場合、代名詞を含む「それに対して」や「お招きによって」という副詞句が前部(P, P')を代表しており、PとQのつながりを明らかにする役割を果たしている。これは次の(4)の用例でも同様である。

- (4) 今、人々の確信を取り戻すということは、当面の危機をのりこえるための、国民の協力体制というものを作っていく上でも極めて重要である(P)というふうに私は思っております。その意味で経済の危機だけではなくて、社会の危機にもっと目を向けるべきではないかというふうに考えている(Q)わけがあります。(『社会の危機』)
- (P→その意味で(接続)→Q)

3-1-2. 接続表現を有しない場合<Q-φ→P わけだ>

因果関係の場合、接続表現の無い用例は少ないが、その少ない中に一つの型が見られる。それは結果・結論Qの前提となる原因・理由の事実(P)をQの後に補足するという場合で、PとQの順序が他と反対になるものである。

- (5) そういう中で今、改めて言われていることは、社会主義の時代には社会保険はあったけども、社会福祉はなかったということでございます。改めて1995年に社会福祉法というのでき(P)、ウランバートル市も1997年からその行政当局がひらかれてきた(Q)わけですが何といたっても社会福祉の専門的な方がいない(Q)。とにかくそういう制度がなかった(P)わけですから専門人がいない(Q)、これが最大の悩みだということございました。

前半の「わけだ」は「社会福祉法が成立→実施機関である行政当局の設置」というそれぞれ単一のPとQが1文にまとまっているのであるが、後半は、「社会福祉の専門家がいない(Q)→なぜか、社会福祉の制度がなかった(P)→だから専門人がいないのだ(Q)」と、理由の「Pわけだ」をはさんでその前後に結論のQが繰り返され、PとQの関係が強調されているのである。

この型（理由の補足）の場合、Qが疑問文となってPの原因・理由を引き出すという形を取ることもある。

(6) さて、この不良資産の問題を考えてみたいと思いますが、なぜ不良資産は動かないのでしょうか(Q)。(中略) 不良資産はまず第一に地価が高い、まだ高くて収容して(?)買える買い手がまだいない(P)わけであります。

(なぜ不良資産は動かないのか(Q)→第一に地価が高くてもまとめて買える人がいない(P)から)

Q→P→Qという構造と疑問文の二つの特徴が共存する場合もある。

(7) 最近テレビ局、とりわけ商業放送局の中には、その放送局がトータルコンテンツプロバイダー、様々な情報を送り出していくんだとか、あるいは放送市場主義感を脱却ってなことが時々いろんな場所でいわれたりする(Q)わけです(融合型の「わけだ」文)けども、まさに放送というものの原点に立ち返ること、放送市場主義ってものに本当にたたなきゃいけない時代なんじゃないだろうか(Q)。確かに、視聴率、市場主義ってのは脱却しなきゃいけないことはもちろんですが、放送ほど、こう簡便な、多くの人達にもすごく安く、手軽に親しめるものはない(P)わけですから、そういう市場主義にもう一回立ち返ってほしいなあと願う(Q)ものなんですけどね。(『デジタル時代の情報環境』)

因果関係の「わけだ」文の場合、論理を重視する資料の性格からか、理由の補足の<Q→Pわけだ>以外のほとんどの場合では、PとQのつながりを示す何らかの標識となるものが見られた。最後の例は短文の連続という、一種のたたみかけるようなリズム感も接続表現としての役割を担っていると思われるものである。

(8) で、これまではそれでやってこれた。ところが社会がですね、どんどん変わっていく、高齢化が進む、情報化が進む、グローバル化が進む、この激しい変化に遂についていけなくなって(P)、構造不況に陥っている(Q)わけですね。(『社会の危機』)

3-1-3. <Q→Pわけだ→Q>と<Q→P→Qわけだ>

さてここでPとQの構造について考えてみたい。

劉(1996)によれば、PとQの倒置が見られるのはQの根拠・理由づけ(Q←{P-Cf}→Qわけだ)と理由の補足の場合(Q←Pわけだ)としており、それはここでもほぼ同様であり、結論であるQの提示後にP(理由・原因)を補足するというのがその内容であった。しかしながら構造的には、劉の理由の補足の場合でも<Q→Pわけだ→Q>となる場合もあり、根拠と理由という概念の違いだけでこの両者を区別することはたいへん難しい。1例(理由の補足)を挙げる。

(9) ともあれ皆さんはぜひ、目の前にあります、あるいは庭先にあります、そして町の中にある木々を見て、そして味わっていただきたい。ぜひそれぞれの名前で呼んであげていただきたい(Q)。樹木というのは単に緑という言葉ではないんですね。皆、名前をもっている(P)わけです。是非名前を言ってあげてください(Q)。(『生活樹木』)

この段落で話者の言わんとすることは、「樹木というのは単に緑という機能だけではない。それぞれに個性があり、名前がある(P)→だから→それぞれを、名前で呼び、味わってほしい(Q)」ということである。この内容を基に<Q→Pわけだ→Q>と<Q→P→Qわけだ>の両型を作例すると、

(a) 木々を名前で呼んでほしい。それぞれ個性と名前があるわけだ。(だから)名前を呼んであげてほしい。

(b) 木々を名前で呼んでほしい。それぞれ個性と名前がある。だから、名前を呼んであげてほしいわけだ。

(a)(b)とも、PとQの配置は同じであり、どちらも因果関係である。しかしながら(a)(b)の二つの文を聞いた(読んだ)とき、聞き手(読者)の感じるムードは異なる。(a)では「名前があるのだから、名前を呼ぶべきだ」という話者の強い主張、断定性(時によって押し付け)が感じられるのに対して、(b)ではPとQのつながりを聞き手に説明し、このような事情があるのだから(聞き手に)どうにか納得してもらいたいという話者の願い、説得するという感覚が強い。

因果関係の<P→Qわけだ>の使用は論理的帰結という面から客観性が感じられ、「ことになる」との互換が可能であるが、話者の主観性が強く出ると「はずだ」と非常に近い性質になる。しかし、いずれにしても<P→Qわけだ>の場合、その内容が絶

対論理として成り立つかどうかは別として、PとQのつながりを聞き手に納得してほしいという話者の姿勢が多かれ少なかれ感じられるのである。それに対して<Q→Pわけだ>の場合、機能としては理由性が強く、「QはP(だ)からだ」と近いものとなり、QとPのつながりが直接的で強く感じられる。そのためQとPの間の接続表現も特に必要としないほどである。

<Q→Pわけだ→Q>と<Q→P→Qわけだ>の両型は、構造・機能はよく似ていても、ムードの違いは歴然としており、話者の意図の違いが感じられる。

3-2. 表裏の「わけだ」文

寺村の分類の(ii)(松岡の表裏、劉の意味・内容の補足)に相当するものである。1つの事柄が観点を変えればPでもあるし、またQでもあるという、言わば表と裏の関係であることを示したもので、松岡の命名である。

3-2-1. 接続表現を有する場合<P-Cr→Qわけだ>

劉(1996)によれば、この型に介在する接続表現として「つまり、要するに、すなわち、言い替えれば」があげられている。(10)は、既定の事実(P)→つまり→その詳しい説明(Q, Q')というもの、(11)は事実(P)→すなわち→結論的まとめ(Q)となるものである。

(10) もっと、もっと大きい有給休暇を見てください(中略)政府が率先してしたのではなくて、事実が先へ行ってしまって、法律はあとから追いかけたんです(P)。つまり、一人一人が強くそれを願い、それが一つの組織のなかで吸収され、フランスの場合は労働組合という形が多かったですね。それが労働組合の意思になって、企業と話し合う。企業がだんだんそれを採用するという形で最後に法律になった(Q)わけです、もちろん政府は強力なリーダーシップを發揮しましたけれど、ただ政府がそうしてくれるのを待っていたわけでは全くないですね。(『時間の創り方』)

(11) このようにして場所の意味は個人や集団によって異なるのみでなく、時代と共に絶えず変わっていくものであり、またどのような場所イメージが支配的イメージになるかということ

は、力関係によって決まる(P)、すなわち経済的、社会的あるいは政治的に強い立場からの場所イメージが支配的になる(Q)わけです。(『新しい地理学を求めて』)

また明確な接続詞ではないが、それに類する接続表現が見られる例として、

(12) この条約は非常に大きな条約で、全体として446条にもなる巨大な条約です。この条約が海の憲法と言われるゆえんは、海、世界の海、この世界の海の法的な構造を作ったという意味で(P)、まさに海の憲法である(Q)わけです。(『海の憲法』)

(13) 大学の中に於いても、携帯電話を切りなさいとか、PHSの電源を切りなさいとかっていうことが、入学試験の時の案内でも言われる(P)ぐらい携帯電話、PHSっていうのは普及して(Q)わけです。(『デジタル時代の情報環境』)

これらの例は、「まさに」「ぐらい」等の語句がPとQを関連づけ、まとめており、接続詞と同様の効果をもたらしているものである。

3-2-2. 接続表現を持たない場合<P-φ→Qわけだ>

まず用例を挙げる。

(14) 私は緑というものを単に緑に化かす緑化樹木ではなくて、まさに生活者の感覚で生活の中に今のような形で取り込んで一日の生活の中で味わうという、生活樹木といったような観点が必要ではないかと思う(P)んですね。何かどうも緑を量として考えたり、機能として考えるのはどうかなあと思う(Q)わけでありませう。緑と大体一言で言っているあたりが気になるところでせうね。(『生活樹木』)

(15) ところがこの場所というものを、人々は視覚的な風景と結び付けることが多い(P)ことに気が付きます。小さな村でも、あるいは一つの国でも、場所は視覚的な風景をともなってイメージされることが多い(Q)わけです。個人や社会、集団は場所に意味を与えるのですが、この意味を読み解くのは風景という視覚的イメージを介してである場合が多いのです。(『新しい地理学を求めて』)

(16) もう何年か前の小説になりますけれども、小松左京さんのSFに『こちら日本』というのがありました。(中略)そこで言わんとすること

は、現代のこの過密化した空間、都市空間を支えているのは、コンピュータと情報ネットワークである(P)ということなんです。原子力発電所の制御を行っているのはコンピュータです。また新幹線の運行管理を行っているのも、これまたコンピュータのネットワークな(Q)わけでありませう。(中略)まさにその状況になっているという感が昨今いたしております。

(『情報化が都市を変える』)

これらの例には確かにPとQの接続表現は存在していない。しかし幾つかの共通の傾向がある。その一つは、まずPとQとに重複するキーワードとなる語句の存在(傍点の部分)である。上の例ではいずれもPをQで部分的に言い替えたり、詳述しているのだが、その鍵となる語句が繰り返し使用され、説明されることによって聞き手の理解が容易になるようにという意図が感じられるのである。さらに、段落全体の内容をまとめる結論ともいべき部分がPとQの後ろに存在することがある。段落(または談話)の論理の展開の中で、主張の結論の根拠をくり返し表現を変えて聞き手に訴え、だから結論は正当なものだということを強調しているということが推察されるのである。

3-2-3. 表裏の「わけだ」文のPとQの離合性

因果関係の「わけだ」文と比べると、表裏の「わけだ」文では接続表現を持たない場合がやや多くなる。さらに同じ表裏の「わけだ」文を、接続表現の有無によって内容を比較すると次のようなことに気が付く。

A. 何らかの接続表現を有するものでは、接続表現をはさんだ前後で観点を思いきって変えたり、それまで言及していない事柄に転換することも有り得るが、接続表現の無いものでは、PとQとで内容や表現を大きく変えることはない。

B. 接続表現の無い場合、「P→Qわけだ」で段落が終結せず、「P→Qわけだ」の後に改めて帰結の内容をまとめとして置くことがある。

また文字面には現われないが、接続表現を有しない場合、PとQの間にプレスやポーズがほとんど感じられず、話者としては前で言い足りなかった、説明が十分でないことを補うぐらいの気持ちであり、PとQで1文という意識なのではないかということが推察される。

一般的にはあるが、表裏の「わけだ」文では、接続表現介在型の場合、基盤となる1つの事実を中心にして一見関連のないPとQを結び付けることも可能であり、それぞれの独立性が強いと言える。一方、介在しない場合はPとQとの一体性が強く、内容的にも大きな隔たりはないと言える。

最後に接続表現を有する場合と無い場合の対照的な用例を挙げる。

(17) 極端なことを言うとき、コンピュータの前に座ってれば、大概のことはできてしまう(P)と。ひょっとしたら大学も行かないですね、自宅にいながら先生の講義もできてしまう(Q)、会社に行かなくても家の中でお仕事ができてしまう(Q)、あるいは東京にあるフィットネスクラブのようにですね、部屋の中で一生懸命走ってますと、目の前にきれいな画像が広がってですね、あたかもフォンテブローの森の中を走っているような、そういう状況すら醸し出すことが可能になってきている(Q)わけですね。

一見たいへんすばらしい、技術の進歩によってすばらしい状況というふうを考える(P)ことも可能なんです、一方では、もしそういうふうになってしまうと、極端なことを言うとき、ある日、外を見てみますとですね、お正月のようにですね、あまり人が歩いていなくて閑散としているというような都市空間になってしまうという、極端なシナリオですけども、そういうことも考えられる(Q)わけですね。

(前半：コンピュータの前に座ってれば大概のことはできてしまう(P)→接続表現φ→(具体的な実際の状況で言えば)大学に行かないで講義が受けられる(Q)、会社に行かないで仕事ができる(Q)、日本にいながらフランスにいながらような状況が作れる(Q))

(後半：技術の進歩によって実現したいへん素晴らしい状況と考える(P)→一方では→閑散としている(わびしい)都市空間と考える(Q)→一つの状況について観点を換えれば考えが180度変わってしまうという例)

3-3. 融合型の「わけだ」文

寺村の分類の(iii)(松岡の分類の③、劉の既知情報の再提示及び常識・慣例、顕在の事実の提示)に相当する。

この型では<P→Qわけだ>のPが現われず、Q

のみである。その中でも Q が一度だけ現われ、 $\langle P \rangle$, Q わけだ」となる Q 単独型と、離れて Q が繰り返し出現する $\langle Q \dots Q \text{ わけだ} \rangle$ の既存型に分かれる。後者の $\langle Q \dots Q \text{ わけだ} \rangle$ の解釈については、劉(1996)に詳しく説明されており⁽⁵⁾、筆者にはそれ以上の考えは無いのでここでは割愛し、この型についてはつながりのみを見ることにする。

3-3-1. Q 単独型 $\langle P \rangle$, Q わけだ

P は存在しないが、P の存在・内容を暗示する標識があるものかないものがある。まず無い例から、

(18) 今日、日本人はどこから来たかと言うお話をいたします。ところで日本人という言葉は皆さん毎日使っている Q わけですが、学問的にはこれが以外にいろいろな意味に使われているということをちょっと前にご紹介いたします。(中略)そして明治以来の様々な説をいちいちご紹介するわけにいきませんので、たまたま 1991 年に発表されました埴原一郎の二重構造説という仮説がございます。これが非常に現在の出発点として便利な Q わけでございます。(『日本人の起源』)

最初の場合は、常識として皆わかっていて当然という気持ちから、後ろでは、話の始点として「これ＝埴原の二重構造説」を取り上げる際に、取り上げる理由を説明すると長くなるので説明は省略するが、文化人類学の専門家として確かな根拠があるのだという話者の態度を示しているものと解される。資料の条件(10分間の時事解説番組)も影響しているであろうが、この後者の例のように、本題に早く入りたい(または次の内容を早く展開したい)ために説明をはしょるという「わけだ」の使用はけっこう多い。しかしながら、問題が複雑であったり、説明を省くと誤解を招くおそれがある場合、その正当性を強調する語句が付加されることがある。

(19) そしてこの活動は、現在世界に広まっております。アメリカ、カナダ、オランダ、イギリス等欧米諸国はもちろんのこと南のアジア、アフリカ、中南米などにおきましてもこうした活動は広がっております。もちろんこうした南の国々では、地元の地域社会の開発に参加している団体が多い Q わけですが、日本でもこういう団体が今増加しております。(『NGO の役割』)

(20) 地理という学科目は日本の学校では、地名や

産物の羅列で、試験のためにそれらを暗記しなければならないということで大変に嫌われ、憎まれています。しかしどこに何がある、ある場所がどういう特色、個性をもっているかということは、それこそ古今東西を問わず実用的知識として必要な知識であった Q わけで、場所に関する知識というのがいわば地理学の原点としてある Q わけです。(『新しい地理学を求めて』)

(19) では「もちろん」と「わけです」を除くと「こうした南の国々では地元の地域社会の開発に参加している団体が多い」という事実のみを述べることになり、なぜ、どうしてそうなのか(南では開発途上国が多い、だから NGO も自国内での開発に携わるのだ)は問われなくなる。(20)も「それこそ」「いわば」「わけだ」を消去すると、「地理は実用的知識として昔から必要であった」という事実のみとなり、地理学の成り立ちを問うという問題意識はなくなってしまうのである。

この型の「わけだ」には、「わけだ」本来の「P と Q の関係を説明する」という意図が薄れ、一見乱用と思われるようなものもある。しかしここで取り上げた用例(論理的独話体)のほとんどは、「わけだ」を取り去ると前後のつながりが滑らかでなくなってしまう、その点から見ると一見無用と思える「わけだ」文であっても、そこには段落内つながりを論理的に述べようという、話者の何らかの意識が働いていることが推察されるのである。

3-3-2. Q 既存型 $\langle Q \dots Q \text{ わけだ} \rangle$

この型では最初の Q と後ろの「Q わけだ」の間が離れているが、Q の繰り返しを示す標識(傍点の部分)がある場合と無いものがある。

(21) もう何年か前の小説になりますけれども、小松左京さんの SF に『こちら日本』というのがありました。(中略)そこで言わんとすることは、現代のこの過密化した空間、都市空間を支えているのは、コンピュータと情報ネットワークであるということなんです Q。(中略)彼はそれを SF 小説という形で描いた Q わけなんです。が、現実には SF ではなくて、まさにその状況になってきているという感が昨今しております。東京には～(中略)で、先ほどお話ししましたように、これから急速な勢いで、都市の中に情報ネットワークが整備されたり、あらゆると

ころにですね、コンピュータが入ってきて、自動改札が行われたりしていく時代になってくる(Q)わけです。で、そこで起きていることは、電話の場合には～

(『情報化が都市を変える』)

この用例の前半は小松左京のSF小説を題材として「人間はいなくとも都市機能は働く」ということの説明であり、「彼は～わけなんです」の語句はそれまでの内容をまとめると同時に、後部の新展開へと移っていくつなぎとなっている。この場合、 $\langle Q \cdots Q \text{わけだ} \rangle$ の前のQは一つの段落の頭、後ろのQは尾の部分であると同時に次の段階の頭であり、その間はさほど離れていない。しかし後半の「先ほどお話ししましたように、～わけです」ではQとQの「…」の部分にはいくつかの話の展開があり、時間的にも、内容的にも隔たりが大きい。以下の例もQとQのつながりを示す標識があるものである。

(2) 今日はバリアーフリーについて考えてみたいと思います。バリアーというのは障害物というような意味です(Q)が、今日は特にその中でも段差、階段などをバリアーと考えて、段差の無い暮らし、階段の無い街造り、そういうものについて考えてみたいと思います。(中略)で、その中で一番大事なことはですね、さっきバリアーといった(Q)わけですが、心のバリアーフリーってのはとっても大事なことじゃないかと思ひます。で、心のバリアーフリーというのはですね、～ (『バリアーフリーを考える』)

最初の物理的障害となるバリアーについての導入、展開から、後半では一転して心のバリアーの話となり、論点の転換が見られる。「さっき～と言ったわけですが」は、その隔たりを埋めるものと考えられる。

4. 結論

最後にこれまでのことをまとめておく。

1. 因果関係の「わけだ」

$\langle P \rightarrow Q \rangle$ 型ではPとQの関係を明確にする何らかの形の接続表現が介在する。これは論理性を重視する資料の性質からも、原因・理由または条件→結論・帰結へと至るつながりをより明確に表現しよう、そして聞き手を納得させようという意図が働いたためと考えられる。一方、理由の補足の

$\langle Q \rightarrow P \rangle$ 型では接続表現は見られなかったが、QとPの配置順、また疑問文と疑問に答える説明という形態的特徴も見られた。この $\langle Q \rightarrow P \text{わけだ} \rangle$ 型の場合、QとPのつながりは直接的で強く、またQの正当性の主張も強く感じられ、場合によっては押し付けのように聞こえることもある。

2. 表裏の「わけだ」

PとQの間の接続表現の有無が、PとQとの結合性の強弱に影響する。接続表現を有する場合は、PとQの思いきった転換も可能であり、P、Qそれぞれの独立性が感じられるが、接続表現を有さない場合、Pだけでは説明が不十分と話者が感じて、その不足を補うぐらいの気持ちであり、PとQは一つであって別のものではないという感覚が強いと考えられる。また後者の場合、後に改めてPとQの帰結の内容がまとめられることもある。

3. 融合型の「わけだ」

Q単独型では、Pは聞き手が知っていて当たり前と話者が感じている事柄(常識、一般的に認められている事実等)であり、特に説明する必要はない(または何かの事情で説明できない)と話者が感じている場合に用いられる。しかし問題の性質が複雑になると、Pの存在を暗示する語句が付加され、Qの正当性を強めることがある。また $\langle Q \cdots Q \text{わけだ} \rangle$ の場合、後のQは新しい展開へのつなぎとなるが、前のQとの隔たりが大きい場合やはり、つながりを示す語句が存在する。論理が重視される場での融合型の「わけだ」は、一見何の機能も担っていないようでも、話者としては何らかの論理を説明しようという意識が働いているものと考えられる。

ムードの助動詞「わけだ」は、あくまでも話者の心的態度を表わすものであり、その意図は単に結論・帰結のQを述べるのではなく、「なぜ(Pから)Qに至るのか」という論理の過程を示すことにある。従って、実質名詞「わけ」と「理由」のように、単純な言い替えで理解することはできない。しかしながら「わけだ」文は話言葉の中で頻繁に使用されるものであり、話者が何を伝えようとしているかを全体的に把握しようとするとき、その理解は重要な鍵となるのである。日本語学習者にぜひ習得してほしい表現の一つである。

(註)

- (1) 『視点・論点』(NHK 放送) より
- (2) 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- (3) 松岡弘 (1980) 「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』第 24 号, 一橋大学語学研究室
松岡弘 (1993) 「再説—『のだ』の文・『わけだ』の文」『言語文化』第 30 号, 一橋大学語学研究室
- (4) 劉向東 (1996) 「『わけだ』文に関する一考察」『日本語教育』88 号
- (5) 劉 (1996) 前掲論文では, <Q…Q わけだ>型について「あるコト Q を述べて, 話をしばらく進んだあと,

もう一度話の原点に戻って, 先と違う方向に話題を展開して行く時に使われ, 新しいアングルからの Q についての論述を導入する」ものとして, 常に「Q…Q わけだが」の形で使用されるとしている。

<その他の参考文献>

1. 日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育辞典』大修館書店
2. 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
3. 田中章夫 (1964) 「～するわけだ・～することだ」『口語文法講座 3 ゆれている文法』P182～192 明治書院
4. 山口良也 (1979) 「『のだ』の文について」『論集日本語研究 7 助動詞』P223～235 有精堂